

学生ベンチャー誕生

インディーズ音楽を配信 一堤 由惟さん(ネット情報3)

インターネットを媒介にし、携帯型プレーヤーで手軽に楽しむ音楽配信システムが話題になっている。

堤由惟さん(ネット情報3)は、音楽データを有料で配信する会社を設立、10月から本格スタートさせた。社名は“非常識な若い枝”を意味する「アブサードスピア」。「今日の非常識を明日の常識へ。若さで既存にない独自のサービスを提供していく」と意欲満々だ。

同社の特徴は、小規模に企画・製作しているインディーズを専門としていること。「全国的知名度が低いインディーズの音楽配信は、



「アブサードスピア」スタッフと。後列中央が堤由惟さん

成功例が少ない。リスクは高いが、やりがいはある。

料金は一曲につき140円。個性的で実力のあるバンドやアーティストを発掘し、メジャーへの足がかりにもなるよう、マネージメント・コンサルティングも行う。取り扱いの目標は年内に50アーティスト・500曲。半年以内に安定経営となる1万ユーザーを目指し「5年以内に最年少社長での上場を」と目標はあくまでも高い。

役員・スタッフも同学部生たち

起業への夢は中学時代から。コンピュータと経営学に興味を持ち、ネットワーク情報学部のAO入試面接では、「起業は最高の自己表現。学生時代に必ずベンチャーをします」と宣言。昨年、他分野で起業した利益を資本金に。川崎市の産学協同研究開発プロジェクト補助金事業としての助成金も得た。

同社役員、スタッフ15人は、「スタッフ一人ひとりがリーダー」という堤さんに共感を持つ同学部生がほとんど。「人を単にマンパワーとして扱う管理システムを破壊し、人の可能性を解き放つ企業文化を築き上げた」。こう話すマネジメントとシステム設計・開発担当の中村哲也さん(取締役、3年)は、ACMプログラムコンテストアジア地区予選出場メンバーの一人。

コンテンツ担当の林佳佑さん(取締役、3年)は「人間関係の大切さを知った。人が何を求めているか、五感をもって探している」。もう一つの事業の柱であるITソリューション部門の統括マネージャー、塚本直大さん(2年)は「学生として一人ではできなくても、力を併せれば可能性が広がる」とそれぞれ頼もしい。

江戸の大長編「南総里見八犬伝」

板坂ゼミ生がオペラ台本 ―世界初 来春、東京で上演

来春、東京で初演のオペラ「八犬伝」の台本を、文学部の板坂則子ゼミ生が9カ月間費やして書き上げた。ゼミ生たちは「学生時代の大きなステップになった」と、舞台稽古を見ながら目を輝かせている。

オペラは、江戸後期の長編小説『南総里見八犬伝』（曲亭馬琴著）を下書きとしたオリジナルで全3幕。作曲家の仙道作三さんが「新たな日本文化の創出」と構想したが、台本作りの困難さから実現出来ずにいた。そこで同小説の研究者である板坂教授に白羽の矢が立ち、板坂教授は「学生と一緒に」と快諾。2003年12月、当時2～4年次生4人に声をかけ、企画がスタートした。



和服姿の伏姫役の女優を囲んで板坂ゼミの皆さん
 (舞台稽古で)

担当は、第1幕「伏姫と玉梓」が板坂教授、第2幕「筒井筒」は高橋佳子さん(平17文)と中島美和さん(文4)、第3幕「生命の旅立ち」は北野いづみさん(平16文)と幸田尚恵さん(文4)。

舞台は戦国時代。原作が持つ雄大な、変化に富むストーリー展開を生かし、いかに表現するか。

同作品についての卒論を終えたばかりだった北野さんは『八犬伝』でオペラ? びっくりでしたが、いわば世界初の試み。物語が私たちなりの表現で蘇る。よし、やってみようと思いました。

毎月1回、神田校舎で台本会議を開いた。作曲・演出の仙道さんと、5人がそれぞれ進めている原稿をもとに「本読み」で役を演じ改訂を重ねた。

小説家志望の高橋さんは「自分のペースで完結させる小説の創作とは根本的に違う。求める表現が演出家とぶつかることが何回も」と振り返る。

舞台の仕事を目指す幸田さんも「私たちは言葉そのものにこだわるが、演出家は音符にいかに乗るかがポイント。演じる時の感覚をイメージするなど、得がたい勉強をしました」と、今後の自信にもつながった。台本は7稿まで進み昨年8月に完成。中島さんは「普通の大学生活では出来ない経験。やり遂げた気持ちでいっぱい」と、満足感を持って話している。

「学生ならではの意外な発想もあった。一緒に奮闘したからこそ意義があった」と語る板坂教授は、さらにポスター、チラシのデザインを院生の井黒佳穂子さん(文学研究科博士後期課程)に依頼。壮麗なイメージが表現された。台本製本や記録作成には雪下恵梨香さん(文4)が力を合わせている。

オペラ「八犬伝」(専修大学協賛)は、来年1月28(土)、29(日)の両日、東京都北区の王子駅前「北とぴあ」さくらホールで。

県人会 北から南から ◆特別版◆

群馬県人会

各県人会では夏期休暇中に地方の文化や風土に触れる「夏期地方活動」を行っている。今年は群馬県人会、愛知県人会の活動を紹介する。

9月1日から3日間、約40人が参加して栃木県的那須高原を訪れ、スポーツレクリエーションなどを通じ、親睦を深めた。青山郁弥会長(経済2・群馬県館林高)は「泊りがけで一緒に過ごすことでメンバーの普段は見えない一面が見られ、お互いに理解を深めることが出来ました」と話した。



今夏、那須ハイランドパークで(前列右から2人目が青木会長)

愛知県人会

「今年は愛知万博の見学をメインに企画しました」と企画・運営の中心を務めた竹本美帆さん(経済2・愛知県菊里高)。9月7日から9日まで、21人が参加。「万博はもちろん、名古屋市内散策も行いました。多くの会員が参加し、充実したものになりました」と語った。



集合＝名古屋港で(海遊館を見学)



愛知万博のマスコットをバックに(右端が会計の竹本さん)